「善き力にわれ囲まれ」

2022 年始めの「岡本牧師と共に味わう讃美の力」で取り上げられたのは「善き力にわれ囲まれ」、yoko さんの美しい讃美動画に始まり、岡本先生の解き明かしとメッセージは聴く者の言葉を失うほどの重厚なものとなりました。その恵みを心から感謝いたします。
こちらのエッセイを書くにあたって歌詞のできた時代背景や、聖書箇所の引用と説き明かしに関しては私の拙い言葉より岡本先生の資料とメッセージが全てを語り、導くものであるので、私は少し周辺の事を加えたいと思います。

この讃美歌の歌詞の作者のボンヘッファーの生きた 20 世紀前半は「戦争の時代」、言い換えると「暴力と殺戮の時代」であったと言えるでしょう。人類はかつてないほどの規模の大量殺害を行い、その罪をさらけ出しました。そして富と権力を求めたあまりに、人類史上最悪の殺戮者であるヒトラーとナチスを生み出しました。それはヨーロッパの一国、ドイツだけの問題ではありません。人間の底に潜む罪の恐ろしい具現化であり、イタリアでも、ソビエトでも、日本でも、世界中に起こった事でした。

1889 年に生まれたヒトラーはボンヘッファーの誕生した年の翌年の 1907 年に、画家を志してウィーンにやって来ます。ヒトラーは美術学校の受験に 2 度失敗してプライドを傷つけられ、金銭的な苦境に陥りながらもウィーンを離れず、その間に民族主義的な思想や、反ユダヤ主義の思想を固めていきました。特筆したいのは、この頃からヒトラーは汎ゲルマン主義（ドイツで 19 世紀に起こったゲルマン民族の優越性と統一を主張する思想）に傾き、リヒャルト・ワーグナーのオペラに傾倒していった事です。
リヒャルト・ワーグナーは、音楽史の中で一つの分水嶺であるといっても過言ではない程大きな存在です。音楽は「ワーグナー前」と「ワーグナー後」では大きく変わっていきました。その音楽史上の出来事については省きますが、ヒトラーは歌劇場に通い詰めるほどワーグナーの音楽の表現するものに傾倒しました。一説には暗記して歌えるほどに。彼はワーグナーのオペラの汎ゲルマン民族主義、反ユダヤ人的な部分を、人種的な優劣を表しているものという解釈をして自分の思想に都合よく取り入れ、後のナチスの精神として育てていきました。
ワーグナーはヒトラーが生まれる前の 1883 年にすでに世を去っていましたが、ヒトラーはワーグナーの家族と親しくなり、特に息子のジークフリートの妻であるヴィニフレートと生涯を通して交流を持ちました。（「ジークフリート」は、ゲルマン、北欧の神話を元にワーグナーの解釈と台本で出来ている壮大なオペラの英雄の名前です。ワーグナーは息子に自分のオペラの主人公の名前を付けたのです。）ヒトラーはオペラのパフォーマンスから、聴衆に自分の主張を強く訴える方法を学んだと言われています。ワーグナーの作品は、本来の芸術的な価値から離れたところで、ヒトラーによって誤った解釈をされてしまったのです。

その時代にボンヘッファーより 2 歳年下に生まれ、激動の同時代を真逆の生き方で生き抜き、その時代が過ぎ去ってからも見事に身を処して名声と権力と富を築き上げてきた音楽家がいます。大指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンです。「帝王」と呼ばれたカラヤンは、1908 年にヒトラーと同じオーストリアで生まれ、出自もヒトラーと同じで必ずしも純粋なゲルマン系の家系ではありませんがヒトラーの求める金髪碧眼で美しく整った容姿と、明晰な頭脳を持っていました。
ボンヘッファーも参加したドイツ告白教会が誕生し、徹底的な無抵抗を標したと同じ頃の 1933 年に、カラヤンは自ら進んでナチスに入党し、以後ヒトラーの為に文化的な広報を担う一員として、大きな役割を果たすようになります。そしてボンヘッファーが教会の受動的抵抗の平和主義路線を捨ててヒトラーの暗殺計画に加わった年の 1939 年に、カラヤンはドイツの国家指揮者となるのです。

カラヤンは戦後ナチスの党員で協力者であった事を否定して活動を再開、ヨーロッパ屈指のベルリンフィルハーモニー交響楽団の指揮者として長く音楽界に君臨します。また、ナチスのプロパカンダの重要な方法であったメディアを使った戦略で自分を演出し、カリスマ的な存在となり、知名度を高めていきました。そしてカラヤンは 20 世紀半ばから後半にかけての、最も有名な成功した指揮者となったのです。
私はまだ十代の頃一度だけ、最晩年のこの人に会った事があります。十代の私にとっては雲の上の巨大な存在の人です。思ったよりずっと小柄なその人は人を寄せ付けないような強い表情をしていて、威厳と尊大さと共に大変な孤独と深い苦悩を身に纏っているように思えました。何を話したのかほとんど覚えていませんが、空気を切り裂くような「Ja!」「Gut!」という大きく鋭い声を覚えています。(その時点での私は彼がナチス党員であった事は全く知りませんでしたが…)
その日に特別に見ることが許されたカラヤンの指揮によるベルリンフィルハーモニー交響楽団のリハーサルで、カラヤンの指揮棒の一振りから出た音を耳にして、恐怖心は一変しました。それは聞いた事の無い美しい響きで、大きな衝撃を与えられ、音楽の道を歩む決心をしたのです。束の間のカラヤンとの出会いの経験は私の生涯の分岐点となりました。

岡本牧師の説き明かしの時間には、ボンヘッファ―と彼が生きたその時代は、本や映像で知っていても自分と多少なりとも関わりがある事など少しも思わなかったのですが、実は私の人生の岐路に大きく関わっていた事に気がついて驚いています。
そして今、とても複雑な気持ちになります。カラヤンはヒトラーの前でもワーグナーやベートーヴェンの音楽をナチスの拡大の為にと壮麗に、美しく演奏していたに違いありません。
勿論大なり小なり、カラヤンのような生き方をした人はたくさんいることでしょう。また、カラヤンはそうする事でしか自分の生きる道は無いと考えてヒトラーに従う道を選んだという事なのでしょう。そう考えると、成功者でありながら決して幸福そうでも柔和でも満ち足りてもいな

かったカラヤンの表情と、醸し出す雰囲気が理解できるような気がします。彼もまた長い年月を苦しんでいたのではないかと思うのです。

対照的にボンヘッファーの 8 人の兄弟姉妹の内、2 人はナチスによって処刑され、妹達の 2 人の夫も反ヒトラー運動に加わって処刑されています。
1944 年、ヒトラー暗殺計画とは別件で逮捕されていたベルリンのナチスの秘密警察の獄中で彼が最後のクリスマスに婚約者に宛てて書いた手紙に同封されていた詩がこの讃美歌の歌詞になったのですがその詩に詠われているのは真実（まこと）の悔い改め、悔い改めの祈りとしての平安、希望、愛ではないだろうかと岡本牧師は説きます。残虐な狂気を裁く神の手を待たずに来たるべき栄光の朝を待たずに十戒の「殺すなかれ」を守れなかった事への悔い改め…主の本当の救いを待たずに自分の力を奮ってしまう傲りの悔い改めの果てにたどり着いた主への委ねに、心が正されます。ボンヘッファー家が住んでいたベルリンの家はドイツ福音主義教会によって保存されているそうです。各地にある「カラヤン」の名がついた通りやホール、保存されたボンヘッファーの家、どちらも神様への悔い改めの場所ではないでしょうか。

さて、この詩は 17 人もの人によって曲が作られたという事ですが本日の Yoko さんの讃美動画はジークフリート・フィーツによるものです。フィーツは 1946 年ドイツのヒルヒェンブルクに生まれ 18 歳の時に教会音楽家、教会オルガニストの試験に合格し、作曲家となります。現在 75 歳、作曲家、シンガーソングライター、音楽プロデューサー、また彫刻家としても活動しています。ドイツのクリスチャンの音楽家で政治家でもあったクレメンス・ビットリンガー、アメリカのエドウィン・ルーベン・ホーキンス、コレッタ・スコット・キング（マーティン・ルーサー・キング JR の妻）等々とコラボレーションしています。
この曲は、1970 年に作曲されました。興味深いのは、この曲が「パストラル（牧歌）」の形で作られているという事です。「パストラル（牧歌）」とは、聖書の、イエスキリストの誕生の時に天使が現れて羊飼いたちに救い主の降誕が知らされたという事を音楽で伝えるために作られていった音楽です。また「パストラル（牧歌）」は安らかに眠るみどり子を表すために子守唄の 3 拍子系のリズムで、イタリアではここに使われている 8 分の 6 拍子のリズムで出来ています。クリスマスにボンヘッファーがこの詩を書いた事から、作曲者は「パストラル（牧歌）」の形で作曲したのでしょう。作曲者がいかにこの詩に共感して、深い祈りのもとに作曲したのかがわかります。そしてボンヘッファーが辿り着いた希望と光を表しているものと思えます。
最後にもう一つ、作曲者のジークフリート・フィーツ、「ジークフリート」というのは前述のヒトラーが傾倒したワーグナーのオペラの主人公の一人の英雄の名前です。ヒトラーの誤った解釈によって現在でもユダヤ系の人々を始め、ワーグナーの作品を忌み嫌う人々は多く存在します。ワーグナーの愛した「ジークフリート」と同じ名前を持つドイツ人の福音音楽家がこの曲を作り、愛唱されている事は神さまの深く暖かい憐れみが示されているのではないかと思うのです。